序

時の流れは、一瞬も止まるところを知らず、わが経済同友会は、創立以来ここに十五年の歳月を迎えるに至りました。

その間、日本の経済、社会が直面してきた苦悩を、そのままわれわれの問題として、経済同友会は、常に現実を直視しながらも事態の本質を究明せんとする真摯な態度を堅持して参つたのであります。

思えば、戦後物情騒然たる中に、先輩各位が築き上げようとした日本経済の革新に対する情熱と理念との光輝ある伝統的精神を享けて、われわれ同友は、新らしい歴史の展開に眼を向け、絶えずわが国経済、社会の発展してゆく主体的、客体的条件を探求して止まなかつたのであります。

十五年の星霜といつても、永却の歩みからすると、寸毫にも値しないかも知れませんが、しかしながら、歴史はその時その時の事象をはらみながら、しかも将来への価値高い可能性を求めているものでありましよう。

今日の時代は、言うなれば、社会といわず政治といわず経済といわず、古い秩序から脱却して、新しい秩序造りの途を開拓せんと努めつつある過程と解します。

国際政治の舞台も、人類滅亡の兵器を如何に管理するかを初めとして、植民地主義の清算、そしてEEC等国際経済ブロック化の進行と、世界は、めまぐるしく生動を続けております。経済

の面だけみても、ブロック化の中に、昔日の封鎖的なものを棄てて、競争と協働との調和を求めんとする理念が基礎となつているようであります。しかも、この時代的潮流から離れさるものは、世界経済の主流から脱落して、孤立化を免がれぬ運命にさらされようとしているのであります。

かような世界経済の動きの中で、日本経済を正しく位置づけして、国際分業を通じて如何ようにして国際協力の体制に、わが国が力強く参加して行きうるかは、極めて重大な問題であります。

しかるに、世上やゝもすれば、甘い成長ムードに酔つて、内奥に潜む幾多の矛盾を軽視する嫌いが多い現実であります。

わが経済同友会は、この本質的な日本の立場と、その向うべき方向とを、国際的視野に於いて把握し、展望し、新しい秩序造りの担い手としての経済人グループとして、自らの意志に基ずいて、国民経済に於ける企業の自主的責任を実践すべき高い使命を、更めて自覚することが肝要でありましよう。

ここに経済同友会が十五年の記念を迎え、記念史を編纂するに当つて、いささか所見を述べて序といたします。

なお、末尾ながら、前回の経済同友会十年史に引続き、本記念史の執筆を煩わした羽間乙彦氏に心から謝意を表する次第であります。

木川田一隆

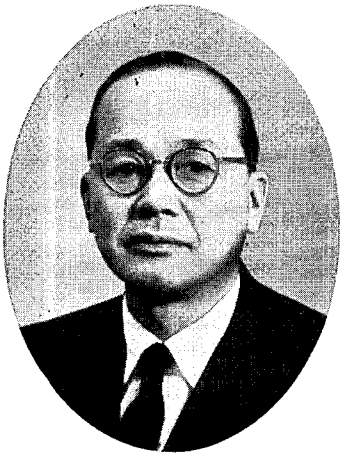
歴代代表幹事

及び常任幹事

中山素平 (32・33)
日本興業銀行取締役頭取

井上英熙 (33・34)
日本セメント取締役社長

岩佐凱実 (34・35)
富士銀行取締役副頭取



木川田　一隆 (35・36)
東京電力取締役社長

水　上　達　三 (36・現)
三井物産取締役社長

常任幹事　山　下　静　一 (32～現)

(註)　数字は在任年度
役職は現職